

登録有形文化財「藤岡家住宅」平成24年冬の展示 概要
期間 平成24年 10月2日（火）～12月24日（月）

『元禄・立花の図』～生け花550年に寄せて～ 展示室2階にて

江戸時代の生け花

元禄8年（169年）～元禄9年（1696年）に出版された「立華（花）訓蒙図彙」・全6巻（藤岡家所蔵）には、7本の草木を7つの道具に見立てて花を生ける「立花」という様式が詳しく解説されています。「立花」はその後、文化人の一般教養とされ、享保14年（1729年）に書かれた「桐覆花談 春」上・下巻（藤岡家所蔵）では、奈良元興寺の隠者によって五本の草花を用いた五景花が提唱されます。江戸時代後期の各種の「重宝記」（江戸時代の百科事典）には、草木九本を「七・九の道具」と呼んで花を生ける方法が書かれています。

藤岡家には五條の人々の生け花の記録も残されています。明治四十一年に未生流第七世家元 が発行した「千種の錦」には、初代五條市長山本米三氏始め十七名の五條市の方々の生けた花型が描かれています。生け花の起源は、小野妹子が聖徳太子の追悼供養のために「供花」を生けたことであると言われていますが、本年は生け花が「花道」として認識され、池坊専慶が花の名手として歴史に記された寛正三年（1462年）から550年目に当たります。これを記念し、藤岡家住宅では「元禄・立花の図～生け花550年に寄せて～」を開催中です。文禄3年（1594年）には池坊専好（初代専好）が7.2坪の床に松を生け、その後ろに猿の軸4本を並べて豊臣秀吉から絶賛されたと言われていますが、今回は江戸時代後期の画家森狙仙（寛延元年 1747年～文政4年 1821年）が描いた「松に猿図」の軸も初公開しています。この機会に、猿の狙仙と呼ばれた名手の絵画をぜひご覧下さい。

「藤岡玉骨の鞆（かばん）」同 期間。母屋一階にて。

藤岡知事さん故郷に帰る

昭和8年6月、奈良県で初めての官選知事（第30代 佐賀県知事）となった藤岡長和は、地元の人々に請われて忙しい時間の合間を塗って帰郷し、北宇智駅に降り立ちました。パナマ帽にフロックコート姿であったと言います。今回は藤岡長和を示す『NF』の刻印のある大きなトランクなど長和所蔵の6点の鞆や特別製のパナマ帽など3点の帽子、ステッキや靴などを公開し、晩年も「知事さん」と地元の人たちから尊敬され愛されてきた藤岡長和の人となりをお楽しみください。